

曉基七部集

下

829-2

俳諧資料カード

年代 文政十二

編者
(筆者)

書名 曉基七部集

備考

下

(下垣内蔵)

水さやとすもむつ 其寺の法仏はねとすや
せしけしとていふとやすき方よ歌とていふ

ふの肌花をくき苦きとてはりさ 秋葉

薫るくさくさ其寺のふらうらうらうとていふやせしと
つらねいふとていふとていふはらや肝やとていふ
男のこゝろやせしとていふとていふ文のまじりやせしと
あつとていふ其甚志のまじりとていふとていふ
すも懐よせしとていふとていふ夏の浮橋とていふとて
西浅ゆりとていふ瀬田の橋とていふとていふとていふ
斜陽の中よとていふとていふとていふとていふとていふ
冷とていふとていふとていふとていふとていふとていふ

まき茂秋田一方へぬきとていふ

中ねんといふ家申白浅玉章の故とていふとていふ
とていふ白のまよこととていふとていふとていふとていふ
つらとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
秋浅げとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
事とていふとていふとていふとていふとていふとていふ

本有寺よりとていふ故菊の墳前よとていふとていふ

権の花扇よとていふとていふとていふとていふとていふ

けのせととていふとていふとていふとていふとていふ

三井寺よとていふとていふとていふとていふとていふ

あつとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
三井の仏の光とていふとていふとていふとていふとていふ
秋葉

とあり思ふに吾徒の語よきたる成富のささ
師のやとる人 昔やうなまゝの以爲をいつくす
日成すたるありとては終へるありたりとては
終へるありやけねんともく論りよし
明きく支是とるを其うく我徒の事よ此合
けり事論うううあうけけいひひ合するとも
しもかゝるうううひのまゝなりやんやん
洞を落し〜怪はけりまゝなりとの真
師とてありて師の友うさ成り〜出ん〜
以て中〜たさう終〜とてよあはれ〜
思ふと〜地とよすう〜

巻切下二

あ〜〜ゆけ地とよすう〜
あや〜ともあ〜人声の山若系、美角
夏陰や種よあうう田舎ひと
ゆゑむれ〜く味程むれ〜た〜声成
侍よ日何あり
や〜ま〜はあ〜の〜志とら〜
長安万戸子親一書
杜らう雨りりよりねん〜
鑑識〜
〜志とら〜の〜園より出〜大井川
京 定雅
京 美角
京 文定
京 實馬
京 鑑識
京 大井川

京 藥

代晴く影頼のくも女うの 凡莖

雜園の苑在穠よ彫望し

みくろり源くく夕多めりくく山

夏の中たくく空う丸く舞よりり

小倉山と藤の子やわくく路の欠

桐吹くく溪織とあくく色あが

夜り

落るるはあやのやよ味渡る月の溪織

白梨栗よ焚火うつろくも溪織の曲

落柿 念ふ

落子柿る人よ尋くわう花電

味巻

宝馬

士朗

全

秋夜

味巻

士朗

一葉 初下八

十すり四の月おわりのひうけたるふあつたをまて

かきよ浦うくつるも人打くあくる雲のそとよ

あつてくくわくくひまきくせくくつすや津車の

わくくせかよくくあうりひくくめくくたを

うくく先きく思まも寢人のくくもくくくくく

よ婦くくうりぬ

大言人の神よすまはるふありの水 士朗

國のたより西満万成り書のとくく

古くくくわくくく波蕪川よふあが 白圖

緯絡の糸川くく計り結むる水 財史

くく子柿まするくくくくくくくくく 子束

涼しやと何ぞも試みたる戸出が

羅城

草の根試まぬぬの草う申

何天

月々の我の神うん川すくく

万城

日る年中の牡丹もよめと愧れ

西満

双林寺西の唐懐旧

人まゝ何たる様のわらふふ

大魯

色に善業未だを月ののりか

士朝

まじくは夜もたる笛の音もか

味基

門河の多き母ををいひの連奇すく

奇仙り

夕陽や水まき後のの腔をうり

蕪村

蒲二三五夜 涼しやと何ぞも試みたる戸出が

筆馬

十日をりもをわらへやとある

大魯

一志をいふと何ぞもたる月の雲

士朝

はくある山よたぐ秋の音

几董

かくもわら萩刈りり一人のつゑ

美角

鏡河のうた 費らるくの門

味基

早もたる方よ水細き水の音

丈芝

る草もきくと松のつゑきして

嵐甲

女もたると銀磨へきと何れりや

秋英

怪志とさ重よくとこの鏡はふ

几董

月をよそとちかしく雲を成禁する
 蕪村
 爰の佛のまげくすすすすす
 大魯
 いらぬせん時後よ人あしく船をよ
 大魯
 ぞよあるまは成たつ縁佳つ
 大魯
 古ま結の浦へたゆつと花の前
 大魯
 妻のまぢやすき時くくつり
 大魯
 縁留くく山をよとよと取よけり
 大魯
 小ぶら婦えくく小栗街道
 大魯
 殺ちやうく盗人恩成殺い其
 大魯
 吾備依備の兄なりといふ
 大魯
 浪河くくくくも言り船のうへ

園の木ののまよとらうあー身
 美角
 ずふハせまよあする人やうん
 几董
 浮う堪うたのうすまの番を
 幾董
 世治の水のうまき布よ赤透
 大芝
 とも明あうや 南 のく屋
 幾董
 悲ひつゝ葉お言のすのさる
 美角
 みうきまの裾をまき林
 大魯
 象の這ふ溜の町のまき
 大魯
 岩を以言のゆたありやう
 大魯
 苦き海のとくもほもく富家
 大魯
 志まう概の官成あつる
 大魯
 蕪村

我あたりにハ何れもなきのまぢりも色たる言く
明きもなき言く一ぬすす目と多うりて明神を
帰しとくゆとく田むり川流流る

結の脊より細目流るとれ里田村川 去朝
結のま肢神と心ふ名のをうりてまふ

結の鼻吹うりてせま言何とく一 結去
是より言と低と山つりて形つりて名あやあ
る妙なりを言言とたま言言とく谷を過を
しりて余言の声流るり以朗言何と一
声の杜宇ありすや真白まを黄言何
結も言言たりと

何れもなき言く一ぬすす目と多うりて明神を

これ吾もとく言く一ぬすす目と多うりて明神を

中とく言く一ぬすす目と多うりて明神を

関の結流るり一ぬすす目と多うりて明神を
南又向とく言く一ぬすす目と多うりて明神を
うし言とく言とく言とく言とく言とく言とく
ゆとく言とく言とく言とく言とく言とく
う形ゆとく言とく言とく言とく言とく言とく
ねとく言とく言とく言とく言とく言とく
あつり言とく言とく言とく言とく言とく

飯後日記

飯出雲寄且水著

飯後の高湯はわたり降り金山山よまきうのりえ
 と穢の出を海の人々もくもくとは再びくさ
 するや朝明の海つらさうじさうあうこ
 めき風何くくはる陰をいつく舟出すたも
 阿ふぬまのよとて長あさうよまのこころり
 修初は風まのりするねめりま後後の江の舟
 すは社何も何くくはる入をまを向成あふ
 後白紙さうけ晴城の更すうけ舟白く
 六月十二日あり

雲中

雲中

雲中

雲中

入りも切り切り切藤兼胸けけけけけけけけけけ
曇川もさくもまほくせさうひ雪里やとあま
濁りく皆くろくし

あまの原の野原ふ蝶そすさずけ 大雲

水くくくあまのや地ひちこ 野上

西河とくくあまの砂金浅出せふ山何のそ
やノ浅くおよふく穿ち入るよら何くして
険あくく穴とせさるやまかぬ心も後
切あくせそくくくくくとさか砂まよし
もあおれさるさくしり水浅ひを極るたよ
流くく砂金浅ゆるとたそ業すさふさの

かたがみ

甲子拾ふわりのあまのめく神象 比呂

はまのいともくくく玉の山を又さる 大雲

あまのりそののやとすくくくやまむらう
うくくくやくくくくくくの花をけさくく大
須の原をくくくくくくくくくく

おまのやあまのむらりのやとくく 孫伝

おあたりよち民成ままよくくくくくく

やくとくくく人の持くくくくくくくく

ままあまのけくくくくくくくくく

極みくくくく後の男の唱くくくくくく

い海脊合の押入舟の山のわのくみり
双舟とありて

明使院近幸のそめまよひくすしある
波よせく終なきひ引浪よせく塩波の
文帝消きくそせ終なきふがゆ急よおまうせて
急の浦とくふまおれ入に言の言度海岸
標樹のせりくみりわわく我田りて三都ハ
舟一の風景五歩よむる十歩よ愛は

山よと

琴成りてと人ありんま本立 水

水よと

阿らうとやあうとあうと云の巻 嘘巻

阿らうとやあうとあうと云の巻 嘘巻

胡笳とらひふまの吹く阿らうんゆとせり

其ののほの波ののののの民が我くはよ
よとく入る事十餘町渡り中絶言の戦せ
らまうと終ふ中してふ所みく今つ田中や
明使院のほは歸れあま鎌倉の中条らため
舟よ夜まのひき日の時りあう成をま
やら鬼くもる信よとくしよまき兵本留
正四郎は成敵アもり堂の平の小ねらまよ
まよと云く成かつてく恨のま所成ねくお

大樹の命何ぞと云ふ事あり垣由ひ
及む方五千回松栞うつ志栞くも唯礼哉
栞一めらまきしすつと何ぞの志と云
御廟の栞とく致しすつ凡の心と栞と云
とく志のかけよるも志切つと唯只成
此くも志ありけり

嗚呼 蟬も腸何れいふ事ぬへし 唯墨

日... 著うとま栞寺よひひも志ありけり
栞何つとくつ栞とくむ栞とくま栞寺よ
後又三と勢皇居何れと志りも後堂の年
後一... 志と栞中比上栞り栞よかつと

一曉初下世一

寺つ一旦破壊すといふ事ありてを栞
あひ再ひ止觀の法堂成ひて志ありけり
御廟の栞水をつとむと志ありけり
栞舎ありけりと志ありけり
願志ありけりといふ事あり

栞室深よつと志ありて栞栞を志ありけり
栞まきたるやうと志ありけり
志ありけりといふ事ありけり
栞栞の栞の栞風と志ありけり
故の細声の栞めと志ありけり
志ありけりといふ事あり

控るよあはれ星のひらめき 此の

とせ茂葉の玉より高く雲の香 孤併

舟の皮をうらもくえくくしと眠り 夫雲

まのりる月よ唄きなき雨の感よふま

水はせらるる上なき故ちとれまじくまを雲

つららひあるはれくくもあやし引くつら

あつるやうの幻よくえりしするねをせくも

せらるる凜凜たる師のゆふも成生る時東洞て

ふれくくこののれはけぬくくせ

君は羽とゆふ香木とたのむる疾き

すけりははらくく一炬のかりをけりとして

曉初下世二

たぶやうよたはわささ

みくく世や仁治三年らうす煙 此水

々物のをまじせよふまじく人をあはれは時ひこ

その切あうあくくをあうし

すれくくはら舟めく後さんくく暇舟くよ

ゆーまはま六湖くく深まよ出つ風をくか

ひぬくく船よくくまらくくは根のさくくち

者のる候よつくく二見を越のねあをくく

つくくの眺くくをくくくくくくこの六金山

巖ハ中天よ懸り裾くくくくくくくくく

覆へあはれはくくくくくくくくく

しつと流るる扇の羽の浮雲あまの
己の別より舟を浮根へせたり形
帆たきか根をかくかとも持よりく志たぬ
なまよりお川へそをもをたきいと裾ひきか
をらとく出の憐むく一孤仏脊にあな
漏るるく何ややく肉つと腹はぼくと
大蛇のくも渠きのふのふふふふふふふ
是はたきく形よありくたつとくた
もうらぬりるる牛とく写る何やまふ
瘦たるる川身ぬとあふたりくとり糸
せくもたすはくもこの肩骨をひんくと

境初下廿三

たむむむむ柳又牡丹写せむるやうあ
りやあ
歳やとあくお月よかくまふ平色のやり地
ものさひくき改くまかしくく扇向
何きくお舎をもとむ忌とりやうのとも
同くやうりおまふいと懣懣
夕顔くく夕顔くく夕顔くく夕顔くく
歴ふくくすもの先は祈何くくくくく
皆人さゆをれさき國のはくくくくく

次の日吉志あふらるるき金糸浦出の山
跡をよ見れよ山の峰の空雲はあやしく
限りなく穿ちくさつり中真くくして
水舌の流は煙浅渚一真き事えもつて
よららのわきわらふ紗を何んかあつて
風儀の上よよあつて次の日又歴くつて
何んかあつてつりんと移んよ
世をゆを舟よ系まらんやうや
水く経所といふる浅きさうく婿あふ
法奇成さう

月かおろし清徳の交わり 徳墓

徳墓

阿たりちうき程麻体とつて破をぬすす
友はよき小倉亜相公のつちう左近の地
貞享のつてつとよかき色はせ給へま
此のの親善守は浅きあつりおさつて
例のつてつこの碑面よ

故左近、藤原氏之墓

藤原氏一舟之墓

水後よふるるる川う跡よ

徳墓

堂せのの藤原のさうと蔓珠沙花

伊上

墜溪の碑をささよあつて

舟破わらぬらうく水方の跡あるまじき

舟吟 舟は侍ハきと沖へさし出く千帆の
渥 百尺の岩以てふ舟楫の帆なりたるや
斜陽 暁を暁清すたる雲霞をくはる舟
船里 舟海航してはぬさつめく舟成す世
何れ 舟中さつて雲霧る舟何れは忽碎る夏は風
光の優たさくは紅の地勢の美をさしあふ
清 雲一乙又雲さるひくさひり
舟 侍すくくひりさく 泥の海とくふまたよ

十三年

つとね 藤よ泥ぬるふ纏の眼が 止水
おき 首うらぬくはこの今よりまゑるつとね

一 曉初下廿五

とさり 先きのめ 葵つとをなすもとさつ
舟 出るう嬉しうは物もひりけ人にもひさむ
織の 湖色は海と金ふ山はぬさなりさる根
あえ して 明は出んとてさうもひもさきのよ
しり つとむさきとあふらハふつとあものあ
事 かくしとひうはせん今宵の夜かささる
て 今もあふさるつと風のよちちや胸ふつり
と あり 風をさしひ雲のり方をあふさして
心 閑す 暁うて風さくとさるけり 雲空星大
さく 月 何れもさよすがくし みる 舟はあ
て 舟つとさるひすあささるつとさるふ 離港の

好人のあり宿夕かきすう志未思人う一日と正
中り終りむう人々えきまうせんすゆさうも
よな去り終りんとあうい思つてうよとて
又よ散白そくくうも所もわりの水くま
ためくおろく難女あまら古きまきあのみ
ゆくゆく向ひる人か花よりのもも色あま
とれ鳴呼まこのせんいひと知ゆらん事せ
金北山に河れまきく攀事四里まうくゆり
まうよ衣伐裂やせ候あよひたうまき伐
まをむく氷く午時始つてきたむけけ
母まの候深まをわけておろまよ北海岸

の形勢あり

炎々の水由ひさ次いそむ

晴基

清水すむはらんとすまの雲起

松佛

山裏に里まきくうまらまらるるあうつてまら
うらさ田まらうてまらるるまらくま枯木伐き
繫ねらまらまのわらひ地まらつて伐きまら
岩まらまら飛うつてまらまらまらまらまら
まのまらまら骨まらまらまらまらまら
流のまらまらまらまらまらまらまら

山にひまらまらまらまらまらまらまら
山にひまらまらまらまらまらまらまら
山にひまらまらまらまらまらまらまら

杉とくしむりり南山は風かきる 曉堂

明窓より極をなまふ湖のみさふ夷の漆は
やしまる湖上のゆゑ眺先をうらうらとくは
廣く舟と水ひきほへりしめ色のた
つらうま鏡のよの體やうまねしき色も
のたもふふたゆをうらうらを静は風情も

わさくま

路の子の隙をうらまのむ日暮香 純依

魚飛てみ做し月の教きは 野上

今宵の阿るうらうら一果より山本の海へ織
絡ふたうらん肉海をうらうら陸海をうらうら

一境初下止

とをかけはさるさきとめく磯の磯の磯所
翅たをもえちの通ふさきとまあう舟とて
後り絡くゆをうらふ必らひ絡つめと絡うら
うらんやうら舟とをわらうらとまうら
ゆうせはくつは侍るふまをうらうらと
たりや蚕のをうらうら物くうらぬやとねる
あもたはもやうせたりと蝶よ怒うらねを
うらうらためうらうらわらうらうら

蚕よねむねむくむの夜さう 曉堂

夜月ぬもむやうらうら舟よまをうら舟とて
あいたうらうらやうらうら舟とてうらうら

魚形とて我々を名に与りて一はがり日湖
遊志く舟の中葉を以てて波の流る
ちのり流るゆゑなりとて呼ぶとて賦め
とて船唇よりなりとて一はがりぬこま文書
形も男がハおふおをてまはれ必と剛ハ何
たてうめさうやれとて物なりとてやう
書及出はくゆとりりのまはれけけり
ゆまつと書ぬるまよ東のまはれとて
漕わたりしゆめなりとて日書なまはれ
のまはれのまはれとて書る船子のゆま
書るなりとてゆまつりのまはれなりとて

尾初下廿九

やうとて船あやうしはまらとて一はがり
波のりてまよ海へてたててゆまつり
款まなく且水船のまはれとてゆま
声流るゆまつり一はがりのまはれとて
連たるまよのまはれとてやうんまはれ輪
とてゆまつりゆまつりゆまつり
けはゆまつりゆまつりゆまつり
ゆまつりゆまつりゆまつりゆまつり
ゆまつりゆまつりゆまつりゆまつり
ゆまつりゆまつりゆまつりゆまつり
ゆまつりゆまつりゆまつりゆまつり
ゆまつりゆまつりゆまつりゆまつり
ゆまつりゆまつりゆまつりゆまつり

いりあるのやすもらうひて暮れんまを目比の
粧し御成も念し終へぬをさんかうす
と云希参考と云家事う又云のり
あてく漕やと云あまよ破りこは火の二も
ミゆれそよせふくと申^エこゝを出してあり
今更ら小木の舟の留と云ぬは取れたる陸より
他人の声りけく女舟を危き事多き
在風の爲甚然んよとやもか櫻はく
るごと命かごとともか如とのまきごと
出つては躍りどとりより先まやくり
今更らよすらひ入りく夜すからぬ
中

三日こゝよ日和つくり

ねむやけのこゝれんよれんよれんよれんよれん
ありよれんよれんよれんよれんよれんよれん
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
の二島たもとせ島のめてたきまらるるるる
天稟充貨の

皇朝のさうさうめやたぬとまはるるる

六月廿九日海のさうさうと舟の出雲備は
ゆりつと親しと後とむと事れり
賀しはははは

于时安永四年乙未七月淨宮

Handwritten text in a cursive style, likely a continuation of the poem or a related note. The characters are difficult to decipher due to the cursive script.

瓜志亭

千里の遊美江戸の花影残溜カクイ

流々として海を去るはくはく

月下よ却く浮んく月下よ輝る

たのまひかたのまはまきり月

人残志をまはみかたあきしむ

游子よえききり的情

瓜志亭

風子の沖の汐阿比事うし決りしはまきり
ついつい備中も島隠城わする海生の
空のたかきうけりる事

空を鹿を捕りよ阿比くきうつお

酒磨備

芋種く糖魚ふはくのを本家

日何く次初まやうのちまきと目今まの
まつらうまゆりくまのやあわたらんよ
折しを姓うまのかまらまらまら城まら
すふたうくまらまらまらまらまら
やすうひの花おもんを西ひう

西文のまらう 島橋あう 双島精金の都の
まらまらまらまらまらまらまらまら
た 神のまらまらまらまらまら

貴とまらまらまらまらまらまら

少盛れまらまら中ま墳の神のまらまらまら
婦らまらまらまらまらまらまらまら
ゆる其のまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまら
遊生まらまらまらまらまらまらまら
楊柳張折まらまらまらまらまらまら

菅のちと洞うん女人堂

細腰の臨人風よりくさるゝ面よちうゝまじり
語んよすうせしあゝうゝめおのひあゝ
日影をいれ海よあつちやうゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たふもりりまげふ田の海

とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
夏のとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
すうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
空たつうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

只目前の幻すふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
只夢のたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
卯の一声よ響

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

吉水院よ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
むゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

海や波やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
清ありゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の扉やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
れ位やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
海の芳き波のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

凡よとて居ひつ、若冲山居集とら影世ふ
ふりうりの和舟波をのーとてまゝるゝとつ
冊子波あたへらるゆりめをさるをいゝとて
あゝ海のさまねんゝとて結つゝかゝる群う
くそ世のうとてすりつゝとてやすゝたは
清法宗後や、唯系名妙法生とておとま
とて

僧をめぐり命とてくの昔法水

たゆく山路波をぬきそ

つんけりり穂まうとてまゝる穂

飯田まゝ

暁初下三六

こゝろ子の新槍とてまゝ根

南都へつ志やすつゝとて所のおやまゝ
こゝろまゝもたふとて自り毎日とてまゝ
てかあゝとて先をまゝとてれゝとて性りふゝ
所ゝとて元実まて坊舎堂波並へゝまゝとて
地地の杜をぬるゝとてまゝの再豪慶の耐遇
まゝとて千載の業まゝとてめ只村老の口持

まゝのま

破おまの花とて文字譜むる

まゝ目野のゆりある社勢何うの祥
とてまゝ

華よ小麻こゝとまじりて裏の山

花の寄りけしふ井手の海りるこそう後の里よ
出ふは夕夕の暮の空をわづらふ影を櫛の山雲の
色色物のはや若のわさうくはまは杉野の
こゝめくは女

梅雪のつら杖こもを啼水語

和月舟自安中り朝の屋より一かへるのやうそ
志すくくま地は所芳哉やとなふ
り京

月紗浅水必し一年のそ終

やよは枝成びよ日寂光地よまきありほるふ

一曉初下三

あまのあまき屋あのを出たりと古きさうしく
かしくとあまの由もは池の汀のをすまひかして
又よ女房のしゆりこ海双膝よりゆかしてのか
みもこゝ縁境むくこは清浄の地誓し懐かま
ゆき浅捨しこふまをたぐまぬのあり

目録とや浅水のゆる懐の甚

大系北里程源と昇福入りとかの在軍將の
あふくく惟喬清子の古廟浅水ゆ

和の花の雪端くすくく涙

あふくく涙

夏百目寺の庵は年控ん

大脊板破くよかゝつとく台廟よのりまゝ之
のたたくとめとまゝ

帷子の目よつと見よお蓋や判る

友の日もとも横川の杉の本末よ涼しくと志ら
く海堂の庵よおきつらぬとく一日の苦熱成
るるひと日雨後の言懐と晴わくりなま
はひとく熱る書の中うて侍る侍のま
ひこのまよすつくとせんすもあつとく
くくまお州よ出るよ暮昏浅色く
古の魂うる夜に言ひまづおのま

徳富下千八

端午

このころや藤みへはまふ梅とん
梅津うつこの境うたひよあ社の道遠さ歩よ
懸ひ十あまひす

梅子の花よよすえむ風はひ

水邊織

言ひや麻よりとく水邊織の所

既又雲とたつこの布とたつとく
やうく夜王寺の禁よ出くやとりの張をよむ
二も情友よひつとくつむく

薄月夜四面よ舟の葉葉

松吹ゆる志趣の音更のりすく蚊の声阿ふり成
先んくましく堂一といひぬむたる木れ
さ満ちあり一は葉子宿く蚕たちりく
飛あまるとき蚊の結まきく脚とく縁成さ
先んく成をくくは成すくひて阿や水く
く成成阿ふり

あふ舟や鬼こもる家の山胡きより

寓居

先んくたきくもく人の命を
昔の後の事やさるる老の阿豊は世せく世
尾湯よりくもくくくくくくくくくくくく

曉初、下千九

伊豫の五松山の茶葉大和の
ゆめをくくくくくくくくくくくく
のちまよりくくくくくくくく
日記やうのまの成くくくくく
ゆめくくくくくくくくくくく
すえくくくく

暖茶
葉茶
川央
佳棠
芝

侍色

歳たひひの結うらやむよとらん
雪のこほけふりつすち候なり
雪すこゑ河るとなき極の月夜
月影もふつたをこゝ冷し
日ハ水よ入く声定し一哉人
夕影や雪のこゑの花の道
文通
秋の秋のゆきもふり月夜
花ありとまじりハるの程思
かん古きもさ返の杉よとまりや

斗券

几董

越後白根

文和

表鈎

峻湖

元室

元室

似信

士朗

古屋

方盛

依青

ありあはれり人のまをこゝ
肌細や弟の舟は月夜こゝ
み月ぬやまをこゝ水こゝ夕
意橋よと明の月のかくつたり
うらむすの菖蒲ふとあゝ
湖影よたも粉のこゑも好
涼しさをあゝ写その不林の
木の上よりあゝさ出たり
さゝ痛みの月夜よおまひん
まら煙のこゝ字は紙出まなり
人のまの裏うら出たりまの山

羅城

関毛

ふ糸

亜油

休舟

本壺

桂五

五周

純風

沙漠

岳輅

永く日名 移るは 住く 庭 残る
 碎さるる 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
 たる 面の中 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
 紙 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆
 雨 止 止 止 止 止 止 止 止
 本 本 本 本 本 本 本 本
 休 休 休 休 休 休 休 休
 二 日 月 二 日 月 二 日 月
 月 月 月 月 月 月 月 月
 終 終 終 終 終 終 終 終
 す すす すす すす すす すす すす すす

少如 け之 羊番 昆明 越毛 稻城 素月 呼是 双府 石墨 本良

教 寺 也 也 也 也 也 也 也 也
 神 何 何 何 何 何 何 何 何

粗乃 白圖

天明七年丁酉夏月 於洛陽旅宿著之

春の鳥なほく枝の花何と
花は時彼の時とけし多敷く
人間の心の涯とあはく雪の内よ
潮を来波あはくさるるの音よ
夏を花免うけし鳥人この子よ
心たせらふは心く出さるあはく
大和掬子わらわは笑たまふ

とてゆ怪志とふかきび世は皆是
造物志の無き世をたふし必
社本屋浅師とする人をむと
入其なきと意安ふか

たれ故我の世に下は
たの世なるたの世なる

晩初下五

春のさくら

月見

大仏をいふと云ふは後の月

新羅浅ひむむ杉の色

白鳥の四角より云ふ浅結はて

扇より紗より浅なるやかり

破き戸の意方より云ふ海の音

層々さわく織る糸のいろ

核中より云ふ波浅なるいろ

童作をその松まつと林を

白四

徳基

代書

羅城

三筆水

関毛

基

四

々々六歩のこゝろをうり下毛はにき
もろりくと控り、の皮
おろの尾は縄無くとせ目首は
人の木履残とくく踏こく
草の穂のこれうつ向く月影
おろく雲をさする葉の湯名の秋
摺る葉のゆゑ形ある袖の姿
おろひ竜田の山の夕雲
おろ先よやつと角出る糟俵
隣の家のおろもるまき
るる蟻、とりりかすと葉よなり

珠 毛 水 基 毛 四 水 珠 基 水

境初下

玉あつりく五藤なり能く
精迦堂の樓つりく眺と
四五所先ん成志くをてそ
坊祇ふく使のちる二人出
る飛の尾のまきとたるおろる日
まき生れの宿とのまきなり
車の邊はわら家川なま
葉の色をまきを言成たふ枝の夕
山境おろく四台成た
一休の松杖とくむる松の蒼
葉畫い絵ははく板なり

珠 基 四 水 毛 四 基 水 珠 基 水

浦風の日霞は遠くまで
 人ともくもくしての空を
 家々もあつたまはるる
 舟籠のこもるる曉の水
 花里もあつたまはるる山
 海もあつたまはるるの波

水 毛 志 城 洲 海

白田 五

曉臺 五

鉢青 五

羅城 五

蘭水 五

間毛 五

士朗 五

帆葉 一

曉初、五、七

孝庵

水ともくもくしての空を
 家々もあつたまはるる
 舟籠のこもるる曉の水
 花里もあつたまはるる山
 海もあつたまはるるの波

青 洲 城 毛 志 水

みちのくにの川にわたる
地は割やうなまき月のひら
玉の粹今宵も花枝ぬらん
阿ふもよもいふさくゝ恋の
まよふよりの阿ふもいふさくゝ
寛平の代の阿ふもいふさくゝ
去年のまよこの阿ふもいふさくゝ
東風の中もあつたむくゝ
折るもいふさくゝ後れ新左衛門
阿ふもいふさくゝ阿ふもいふさくゝ
夏もいふさくゝ阿ふもいふさくゝ

曉初下八

橋脚はるるのまはりの
阿ふもいふさくゝ阿ふもいふさくゝ
根つゝもいふさくゝ阿ふもいふさくゝ
まよふもいふさくゝ阿ふもいふさくゝ
まよふもいふさくゝ阿ふもいふさくゝ
まよふもいふさくゝ阿ふもいふさくゝ
まよふもいふさくゝ阿ふもいふさくゝ
まよふもいふさくゝ阿ふもいふさくゝ
まよふもいふさくゝ阿ふもいふさくゝ
まよふもいふさくゝ阿ふもいふさくゝ

朔 基 素 風 朔 基 素 風 朔 基 素 風 朔

飛山の珠の貝よとるるよ
巖を代送るるよちの美子
むのよとと 綴の報やよとん
さむい鳥帽よのとくぬぐり
鳳 素 巻 三

岱青 八 士朗七

紀鳳七 入素七

曉臺七

曉初下四十九

花籃

花ふり人皆見よ弁よ

羅城

うけゆりくと蝶香のそ

茶水

葉の海草とたくまめとて

間毛

舟引也と垣根倒るく

楚分

所く月成定めぬあつた

士朗

角よかちやる島京の麻

砥火

そをねとと衣成物と林の丸

白圓

そよねとと一きしゆ和云

曉臺

浪のそよあを湯へうせ

水

つしよとたるとはケの海松房

珠

和りの音よ志坊と是つ
急のそは送るありつと
世もとのと抽もも声なき
ふ新橋よりうらさけさ
草柱くまにゆられも
能くはく描捨く舞る
まきの月つたを風う人
帯あさ里のりぬけ
水りあれぬるは草ゆけ
後ひえつふま婦八十
三ッ鐘をふり後つくと

分 毛 水 珠 園 基 朗 文 毛 分

曉初 五

松のまよちうき志坊
装束裂れ玉上の僧を墜さ
是へあき血のものを拭く
まきの声お中の歡業は
まよひまき牛よりまよ
何とやあおの言多き人の後
名をまよかりのまよと海
井川の月より明くまの松
草くまよる屋根の始末
舟の柱はまよと海まよ
まよとまよる風の海まよ

文 園 基 朗 文 毛 分 水 珠 園 基 朗 文 毛 分

山鳥の声の中より暮る日や
糸よちりく弱きを言ふ事せ
花の陰産を色一かゝ錦
ひきこも一しり初又言行

塔 水 毛 糸

羅城 五

蘭水 五

圓毛 五

梵分 五

士朗 四

珉文 五

白岡 四

曉基 四

曉初

色

まきまきしりく又言ぬくの杜味

少如

こゆふたつ成法不足袋の結

岳輜

小琴糸水よ緒ふる人こえく

稻城

畠の鶴の音 初言や

曉基

初月よ浮車き為定むらん

叫道

暮よ何處ある松の林風

如

鬼灯ハ落る色を言ひ言ひ

基

美よねらまきしりく言ひの言

基

曉の言しとま言ひ言ひ

輜

大屋をりのの果ハ言ひ言ひ

城

とく言く鼓す穂めつし
 足利殿代ハまくとれし
 概橋やたつ伐出山月
 ぬまをりるよ柔きるる
 下控の女身迎ひよある
 肩抱ちうふ服をくしり
 花のよはけしつる牛の面
 錦茶とつせハ蝶のたろく
 野路のまき仁和寺の鳥子
 高千くちりよををたすして
 おとよま申別よ西の障出

如 輅 基 基 格 如 輅 基 基 格 如

曉初下五十二

大角豆うつりのあさみとり
 繩ふーのうきまけなまの雲
 園よゆまことせう次中の地啼
 南さ次まよは津津の満の月
 小足秋神よ塩辛残煮る
 秋蟬のあきやうよふ冬毎
 長明くゆる星の朝日
 北まきくよあをひたる葉の夜
 南まき男のうきまけはるる
 南まきの花まきよは彼岩橋
 とうくまきまの柳うらみ守

格 如 輅 基 基 格 如 輅 基 基 格 如

周中の系破人の言はかきまて
益々名をふる顔のむつり
そは後くはれう垣根のまのつ
塚とくともあるとくうつむ三法

基 培 味 意

少如 七

岳輅 八

稻城 七

曉基 七

呼道、

曉初下五三

妻

今更のふりなよゆり

やすうひの花とふすまか法あるを

曉基

とくさめと花咲玉のいそか

岱青

梅柳 さのふの枝はるうりやう

白岡

うけろふはれおひ出を枯穂を

白岡

まつ 鹿 鹿の影ふのひ

岳輅

おまのそれとより移す人よあや

茅橋

とれと身もまて空世のまの雨

趙亮

古依のふをくまてせしめあへ

さすらう

西の山行 夕のせうけく 春の由
 言も日れ出ぬうち 藤月夜
 うらひよこの 鳴く 遠まる 猿鳴
 枝をよき 藤生 の 枝の 朽木
 とかくしと 中 茂 山 や ね ち 月
 ともし 枝の 花 ぬき ころころ 音
 人 冠 しく 涼 山 の くれ 枝 木 び び
 羽 け け け 音 出 る 花 の 葉 け け
 揚 び ち り ち ち 春 の 日 け 万 々 々
 正月十三日 伊勢の 山 び び
 新 ぐ ぬ の 神 事 を り ち

紀風 フカキ
 楓生 フカキ
 猿基 フカキ
 素州 フカキ
 社尹 フカキ
 稻城 フカキ
 退六 フカキ
 猿免 フカキ
 可有 フカキ

疏初下平四

春風やをうと 海の 柳子うら
 春柳よ 山 崎 の つも 礼 進 たり
 水 空 田 也 道 ぶ と 遠 ぶ 春 の 人
 け 春 を 捲 り ぬ 人 を 懐 け け
 白 う を や 春 の 柳 け け 夕 ぶ ぶ
 至 子 子 子 の う ち や 春 う け け
 春 柳 け け 鳴 出 せ る と 鶯 の 声
 神 雛 や 粟 粒 や け の 鼻 粒

古明 フカキ
 曉基 フカキ
 呼道 フカキ
 圃曉 フカキ
 一声 フカキ
 文相 フカキ
 担乃 フカキ
 入素 フカキ

夏

け け け け け け け け け け

万益

朔雲のゆくは月を伴ひ村あり

董芝

夏の夜残とよりひらけたる草の上

葉水

西上人の枯井の芒うたをみそ

んぞと詠まきし一葉才候の世哉

うちのと人の菊雨く草や哉

法をせく送りある

れつとくもまき記うその世哉

士兼

夕、とや湖の水をささくたき

昆明

虚也那やたきくこの後の蟠牛

閻毛

かしくらまを二月月入る西の東

珠史

休の子や一葉ようつと八半は

曉暮

曉初下五十五

あうめ入まらやうく照しと世哉

魯友

何よも浅草ゆてあふんけりぬ

若遊

夏の花の影よたきく照りたり

羅城

浮葉春草あふまきくと世の蒼

台中

若休のふりくくくまき月よ

卓池

声とくく一人と世の帯と世哉

曉暮

うくくあき首引くくなる世哉

扇洲

風月よりくくんまのて世世哉

趙鳥

之婦の阿くくく世をくく

郭云おのつげとと山のねく

士効

夢かく志んよま世世世なりひ

岳格

曉菴

桂五

白岡

沙莫

螢法ねふくく流や座の音丹巨
蠅うらのうたつて舞をてまおれ
まつね魚西施う紙のまうりお
割れ中のまうりのひくくれ

丁卯三月の年六月二日

年相公信長公の二百年と免より

あくくせたまふくくく尾張の公

徳見寺くく懺法供養うたう

おとくくとりけりくくくはははは

つうふくはははは

けふの法法習ひうらもまのあ

曉菴

曉初下五十六

卯史

楚を

伏青

投部ねくくめくくく
わうましくくくはまははは
夕立や麻の葉あまは通り

昔良川みく

他即

沂風

北橋

白岡

徒鳳

くはくくくの水あもくくねね
ひあくくく風流若葉のねね
徳雲を金や仙音ねき思の花ね系
あつてまうりくくくくくく
ゆふくくくくくくくくくく

杖

枯くくたきをねくそみもは林の山
わく海の上もは林の中へへ
四よりおまのよよと色ぬるはア

らつ田よきひく

満月やぐよき葉も秋の色

わりのまきひいたき月之光の

まのよひつをりりかをみるひ

あうまき星も今うらも居まてまも

まのくのねよは葉のつるつるぬ

秋風や葉のまを口のまき

月ひつるまふ水の橋をうれ

士朔

羅城

大集

岳格

芋格

支子家

味茶

呂城

貝山

耕魚

曉初下五十七

すはちやや雲をまきまき如月花
雲をく月よ花のうけりりら
月見まきく花も興ふ山のよ
夕のわわわわわわわわわわわわ
陣やうらうらうらうらうらうら
踏舞の影を寝るひく奇絶
古山とけらららららららららら
影をまきく花もまきまきまき
あははははははははははははは
まきまきまきまきまきまきまき
柿の葉のまきまきまきまきまき

鈍平

士雄

饗春

間毛

荷葉

羅城

桃江

木人

信尼

宇文

聴吳

朝うほの花鳥もさくはまはる

杉六

娘浅う忘れひさす

うさささの顔をしらけなす

園崎

穂芒のさきうさむむさきなり

万丈

赤後の玉うしろの志たかり穂の而

魚住

小さうしやうさき生たる落お葉

亀手

槍あくとれの中と山ねや

岱青

焼栗や槍のうしつゝ鬼う珠

純風

けり秋や僧よりあふ伊勢の山

沙真

けりうつゝあふ書の手さき

昆明

重箱の二の横うりは月夜

稻城

一 暁初下五十八

八月の雲ねりしるや鴨の声

猿丈

まつとまを松旁も店のかつ烟

上助

山鳥のけりしる麻のわさき

曉基

きま八まじしるらんぬ小葉

白卜

あ

冬梅たるとやハ伊吹ねら

亜満

冬梅田あつ時菊

曉基

たそそう秋をたすく月書と秋

葉水

冬木立々やや増かたの墓

朱壺

いろくのふさしやあまの雲

少如

炭の香の浅崩すや丹波山
 常小つ浅焚焚く海さう岩
 岩の小氣はくせせつ時を
 鉢たぐくそ海うを六伊勢あう
 枯芦の浅をゆく月さるも
 さるもや藤塩けつる鉢の籠
 むつすうう竹や枯理のひつる
 志るもく終る嵐の目となる
 由も大さうけくもた歌う
 さるもくもく又枯柿と熟りよなり
 味の香志つるや年々をり

針之
 大阜
 羅城
 素洲
 呂宙
 子繩
 士朗
 友岐
 禁言
 呼道
 盛青

暁初下丑九

雪の日也いつ志る為の夕へあり
 雪の降る夕日俗の人よは訪

せい

雪二守さるる海あすくく
 降雪よきあけぬるゆき力合
 とちあるるもあ何言の朝
 雪の〜ひの雪とつ集りま乃山
 さく山や夕日さかふ月射る
 燈は佛浅くくし十夜う南
 冬日氣籠の持ひくく長
 葉の籠るま葉の煙か〜ふ

素角
 餘文
 四光
 眠情
 宇足
 沂風
 強吳
 入素
 桐門

浮言の中よりとらゆる戸人
 枯たうと籠るけし初るる
 うちら割く枯たうとらるる雪の霜
 一とらるる雪の霜
 卓池
 桃生
 閻毛

天明八戌申端月

善兩史在世の俳諧といはれぬと
 三と第 梅綴りといひけり
 ことせのむし 詠ふ人
 かりり旁に生志乃共
 七部と集あまぬく世の言を
 ぬ是作をいん

子しるをいふ人友より乃
しる小物うけ定りしや
しる

文政十二とふ

うしるの秋

松東鳳書

曉初下空跋

唐本和事佛書石刻以經類
諸家以花板賣抄所

東京市淺草區北東仲町五番地

書林

淺倉屋 吉田久兵衛

